

## 源通親の『千五百番歌合』百首における先行作品撰取

岡本 光加里

はじめに

『千五百番歌合』の原型は、建仁元年（一一〇一）六月頃に詠進された後鳥羽院の第三度応制百首歌である。後鳥羽院は翌年九月、この百首歌をとりまとめて二十巻の歌合とし、十人の判者に分配して判進を命じた。それは当代随一の権勢を誇った源通親の死の、一ヶ月ほど前であった。

通親は『千五百番歌合』および、後鳥羽院最初の応制百首『正治初度百首』の作者に名を連ねている。薨去により無判に終わったものの、『千五百番歌合』夏部の判者にも指名されていた。通親が後鳥羽院歌壇に与えた影響の大きさは久保田淳氏の指摘されるところであり、<sup>①</sup>また通親家の影供歌合の重要性も、上野順子氏により示されている。<sup>②</sup>『擬

香山模草堂記』等の作者でもあり、『千五百番歌合』の作者の中でも様々な観点からの検討が必要な歌人だろう。近年は尾葉石真理氏により、『正治初度百首』における通親の表現や『万葉集』撰取の方法についても検討が進められた。<sup>③</sup>本稿では通親の『千五百番歌合』百首（以下「通親百首」と呼ぶ）の先行作品撰取に主に着目しながら、通親百首の特色の一端を考えたい。

以後『千五百番歌合』の本文は国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本データベース<sup>④</sup>の高松宮本の白黒写真により、有吉保氏の校本を参照した。ただし引用にあたっては私意により表記を改めた。『万葉集』は『校本萬葉集』により廣瀬本の訓を用い、歌番号は旧国歌大観に従った。その他の作品は、歌番号、本文ともに『新編国歌大観』に

より、表記を適宜改めて引いた。また『千五百番歌合』より通親詠を引用する際は、通親百首の中での通し番号を歌の冒頭に付し、歌の末尾の括弧内に『新編国歌大観』の歌番号を示す。

一 季部における『古今集』『伊勢物語』撰取

最初に、通親の『千五百番歌合』春部二十首の先行作品撰取をみてみたい。先行作品撰取が認められる場合は、左にその先行作品を一字下げ小字で併記し、撰取元の歌と新歌に共通する表現に傍線を引いている。

1よをこめて竹に囀る鶯の色の色にや春のみどりは

(四)

2石そそぐたるひのうへにさす日かげうちとけにける

春のはつ空 (三三二)

石そそぐ垂水の上の早蕨の萌え出る春なりにけるか

も (万葉集卷八・一四一八・志貴皇子)

3昨日までつららのそこに見しねぜり今朝は雪消の水

にこそつめ (九〇)

4春風になびくのみかは鶯のきゐるにたへぬ青柳の糸

(二一八)

5ながむれば見えみ見えすみはるがすみたちゐる野辺

に若菜つむ人 (一四六)

難波潟浦ふく風に波たてばつのごむ葦のみえみみえず

み (後拾遺集春上・四四・読人不知)

6くれはどりあやにながめのなりゆくかみどりの空に

あそふいとゆふ (一七四)

野草芳菲紅錦地 遊糸繚亂碧羅天

7はるがすみたてるやいづこはるをまつこころよりこ

そたちはじめけれ (二〇二)

春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪はふりつつ

(古今集春上・三・読人不知)

8春雨にこぬれかくれて鶯の声うちしめる夕暮れの空

(二三〇)

春去れば木末隠りて鶯ぞなきていぬなる梅がしづえに

(万葉集卷五・八二七・作者未詳)

9ひきつらね帰るこしちに日は暮れぬ雲のいづこに宿

をかりがね (二五八)

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿る

らむ (古今集夏・一六六・深養父)

10春雨の心細くもふるさとは人くといとふ鳥のみぞな

く (二二八)

梅の花みにこそ来つれ鶯のくく人くと厭ひしもをる(古今集雜鉢・一〇一一・読人不知)

11 春草をとびたつきぎすつまごめに今日な焼きそとなくにやあるらむ(三二四)

春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり(古今集春上・一七・読人不知、伊勢物語・一二段、初句「武蔵野は」)

12 むめもむめわが身もわが身やどもやど春や昔のとのみながめて(三四二)

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして(古今集恋五・七四七・在原業平、伊勢物語・四段)

今日も今日菖蒲も菖蒲変はらぬに宿こそありし宿と覚えね(後拾遺夏・二二三・伊勢大輔)

13 花散らぬもりとなさばやねぎごとをさのみききけむ社たづねて(三七〇)

ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果は嘆きの社となるらめ(古今集雜鉢・一〇五五・讃岐)

14 春ごとに花もなげきやつもるらむ散るをうらみぬ人しなければ(三九八)

春雨のふるは涙か桜花散るを惜しまぬ人しなければ(古今集春下・八八(一本) 大伴黒主)

15 あかざりし花のなごりをながめよと木の間もりくる春の夜の月(四二六)

木の間よりもりくる月の影見れば心尽しの秋はきにけり(古今集秋上・一八四・読人不知)

16 わび人のすむとはきけどあしびきの山のかひあるいはつつじかな(四五四)

わびしらに猿な鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ(古今集雜鉢一〇六七・躬恒)

17 (空白、二百四十一番)

紫の根はふよこ野の春野には君をかけつつ鶯鳴くも(万葉集卷一〇・一八二五・作者未詳)

18 昔たれ井手の山吹うゑおきて花ゆゑ里の名をのこすらむ(五三九)

19 花ちりぬなにかは春もをしからむ花ゆゑにこそ春を待ちしか(五六七)

長閑なれ心をさらにつくしつ々花ゆゑにこそ春はまちしか(山家集春・八二)

20 春の色も今日をかぎりの夕づくひさしもや藤のうらむらさきに(五九五)

とはぬまをうらむらさきにさく藤の何とてまつにかかりそめけむ(詞花集恋下・二五七・俊子内親王大進)

このうち『万葉集』撰取と考えられるのは二首(17の逸文を含めれば三首)である。春部は『万葉集』撰取が最も多い部立であり、他に『万葉集』撰取と考えられるのは、通親百首全体でも63「こゆるぎの磯の松風音すれば夕波千鳥たち騒ぐなり」(冬・一八八九)、76「玉垂れのこすのひまのみしげればかけても人を頼むべきかは」(恋・二二五三)の二首しかない。それに対して、『古今集』を撰取する歌は春部に九首、夏部に三首、秋部に五首、冬部に四首あり、その他の勅撰集撰取は順に三首、三首、五首、三首ある。合計すれば、季部七〇首中二二首が『古今集』、一四首がその他の勅撰集入集歌の撰取である。

通親の先行作品撰取については、桑原博史氏の指摘以来、『正治初度百首』の『万葉集』撰取が注目されてきた。<sup>7)</sup>尾葉石真理氏の調査によると『正治初度百首』全体には二二首の『万葉集』撰取があるという。目良有子氏の指摘されたように、<sup>8)</sup>たしかに『正治初度百首』時とは、『万葉集』と『古今集』の比重が逆転していることが確認できる。

それではなぜ通親は、従来の路線を違えて『古今集』歌を多数撰取したのか。この背景を見定めることは容易ではないが、多数の先行歌撰取、とりわけ『古今集』などの勅撰集や『伊勢物語』からの撰取は、『千五百番歌合』中通親

のみに限らない。詳しくは前稿<sup>9)</sup>において述べたが、『千五百番歌合』では後鳥羽院から近臣の源家長に至るまで、幅広い歌人に『古今集』や『伊勢物語』の撰取が多数みられる。この状況からすると、『千五百番歌合』の先行作品撰取は、個々の歌人が偶然同時多発的に行なったこととみなすよりも、下命者後鳥羽院の意向に基づくものだったと考えるほうが自然だろう。応制百首の下命者が、百首に詠むべき題材を表だつた形ではなくゆるやかに指定した例は、すでに崇徳院の『久安百首』、後鳥羽院の『正治初度百首』について指摘されている。<sup>10)</sup>

『千五百番歌合』は後鳥羽院の勅撰集(のちの『新古今集』)編纂事業が始まる直前からその初期にかけて成立しており、後には『新古今集』最大の撰集資料となつた。応制百首と勅撰集の編纂が顕著に連動するようになるのは後代のことだが、前代の応制百首と勅撰集との関係が、すでに村尾誠一氏により指摘されている。<sup>11)</sup>『千五百番歌合』詠進當時の後鳥羽院の胸中に勅撰集編纂の企図がなかったとは考えにくく、周辺の歌人もそれを察知・予期していた可能性がある。<sup>12)</sup>かつ、後鳥羽院が勅撰集編纂にあたり『古今集』を意識していたことは、その名を『新古今和歌集』と定めたことは無論、成立の干支を『古今集』成立(延喜五年(九

○五)のそれに揃えるべく、元久二年(二二〇五)竟宴を行わせていることから明らかである。ここから遡れば、後の『新古今集』『千五百番歌合』に多数の『古今集』撰取がみられることにも不思議はない。『千五百番歌合』において、後鳥羽院が先行作品の中でもとりわけ『古今集』の撰取を推奨していたのか、あるいは撰取する作品の指定は特になかったものの、歌人たちが後鳥羽院の復古的姿勢を汲み、進んで『古今集』を重んじたのかは目下判断しかねているが、どちらにせよ不自然なことではないだろう。

以上の仮説はいまだ状況からの想定にとどまっており、今後も重ねて検証する必要があるが、少なくとも通親の季部における『古今集』撰取は、この仮説を否定しない。

## 二 恋部における非勅撰集的な作品の撰取

問題は、恋部の場合である。春部の場合と同様にして、十五首をすべて掲げる。

76 玉垂れのこすのひまのみしげければかけても人をた  
のむべきかは(二二五三)

たまだれの こすのきけきに いらかよひきね たら  
ちねの はがとはれば かぜとまうさむ(万葉集・

卷一一・二三六四)

77 つつむ袖誰がこふるとはもらさずとつくらん墨をあ  
はれとも見よ(二二八一)

わぎもこが額の髪やしじくくらむあやく袖に墨のつく  
かな(俊頼髓脳)

78 せきとむる心も苦しいざさらばいさらぬの水もらし  
はててん(二三三九)

なき人のかげだに見えずつれなくて心をやれるいさら  
ぬの水(源氏物語・藤裏葉)

いさらぬははやくのことも忘れじをもとの主や面がは  
りせる(源氏物語・松風)

79 あふことは筑摩の神に祈りてきなべての教に入れじ  
とやさ(二三六七)

近江なる筑摩の祭とくせなむつれなき人の鍋の数見む  
(伊勢物語・二二〇段、拾遺集雑恋・二二一九・読人不

知〔初句「いつしかも」〕

80 いくよしもあらしものゆゑあぢきなくうき身をかへ  
て思ふべきかは(二三九五)

いくよしもあらし我が身をなぞもかく海人の刈る藻に  
思ひ乱るる(古今集雑下・九三四・読人不知)

81 見し夢をしのぶる雨のもらさばやうつつともなき袖  
の雫を(二四二三)

見し夢をあふよありやと嘆くまに目さへあはでどころ  
もへにける (源氏物語・帚木)

82 しのぶれどよそめやいかにあさであらふたらひの水  
の影もはづかし (二四五一)

あさであらふたらひの水にかけみれば恋にわが身はお  
もやせにけり (顯昭判詞所引)

83 明け暮れはなれし昔の忘れつつ夢かとのみぞ思ひな  
さるる (二四七九)

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見む  
とは (古今集雑下・九七〇・在原業平、伊勢物語・八

三段。業平集初句「忘れつつ」)

84 ながむれば心さへこそうき雲やその古の夕暮れの空  
(二五〇七)

雨となりしぐるる空の浮雲をいづれの方とわきてなが  
めむ (源氏物語・葵)

見し人の煙を雲とながむれば夕べの空もむつまじきか  
な (源氏物語・夕顔)

85 山城のこまの瓜生の世の中やならしははてで人のつ  
れなき (二五三五)

音に聞くこまの渡りの瓜作りとなりかくなりなる心か  
な (拾遺集雑下・五五七・藤原国章)

山城のこまのわたりの瓜作り な なよや らいしな  
や さいしなや 瓜作り瓜作り はれ 瓜作り あを  
ほしといふいかにせむ な なよや らいしなや さ  
いしなや いかにせむいかにせむ はれ いかにせむ  
なりやしなまし 瓜たつまでにや らいしなや さい  
しなや 瓜たつま 瓜たつまでに (催馬楽・山城)

86 恋ひ死なんいづかたへとて息のをの絶えん命の名こ  
そをしけれ (二五六三)

息のをのたえなん後は君にてもあはれいづこと我を尋  
ねん (伊勢大輔集・一五二)

87 忘れ草おふる野辺をばたづぬれど昔偲ぶぞ猶も露け  
き (二五九一)

忘れ草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後もた  
のまむ (続古今集恋四・一二六二・在原業平、伊勢  
語・一〇〇段)

88 しのぶともものきのたま水つぶつぶとありし雨夜の物  
語せよ (二六一九)

雨ふればのきのたま水つぶつぶといはばやものを心ゆ  
くまで (俊頼髓腦)

89 伊勢の海人のみるめの果てよいかならんおふの浦梨  
なりもならずも (二六四七)

おふの浦に片枝さし覆ひなる梨のなりもならずもねて  
語らはむ（古今集東歌・一〇九九）

90 なほつらし聞かず顔にて明かず夜に枕に近き鳥のう  
きねよ（二六七五）

可憎病鵲半夜驚し人 薄媚狂鷄三更唱し曉（遊仙窟、新撰  
朗詠集雜・七三二）「あなにくのやもめがらすのよなかに  
ひとをおどるかす なさけなきうかれどりのあけもは  
てぬにあかつきをとなふる」

『古今集』撰取が三首であるのは、春部に比べれば少ないが季部と共通の傾向である。ただ、恋部では出典の不確かな古歌、俗謡の類と考えられる歌からとっているものが三首（77 82 88）、催馬楽および催馬楽撰取歌をとるものが一首（85）ある。先程『古今集』撰取とした中でも、89の撰取した歌は同音反復を特色とする東歌であり、こうした傾向と遠いものではあるまい。また『伊勢物語』撰取歌のうちにも、近江筑摩社の奇祭を詠む79が含まれる。十五首目の撰取元の『遊仙窟』は顕昭判が指摘するものであり、『正治初度百首』においても通親ら数名に撰取されている作品だが、周知のごとく好色性が濃い。

つまり、恋部では季部とは異なり、俗謡・歌謡の類や、やや奇抜な内容を持つ歌の撰取の数が『古今集』撰取を上

回っている。部立や題設定に応じて多少詠歌の性格は異なるものだが、『千五百番歌合』百首は無題の四季・祝・恋・雑とごく穏当な構成である。このような百首の中での俗謡の類の撰取は、応制百首に望まれる規範から逸脱しかねない危うさも持つ。恋部後半の判者を務めた顕昭も、82について「右歌は、世俗のくちずさみに『あさであらふたらひの水に影みれば恋にわが身は面痩せにけり』、この戯れごとに通ひて待るにつけてもをかしく侍り。但し、晴れの歌合にもかやうの戯咲歌はとりいづる事、古くも侍るめり。寛平太上天皇の御時后宮歌合に『いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさをあさなあさなよぶ』、藤敏行歌なり。『秋風にほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりすなく』、在原棟梁歌なり。」と先例をあげている。この判詞は通親詠の撰取を評価するものだが、同時に、先例があったからこそ「戯れごと」の撰取が許容された可能性も示している。この顕昭の判詞は歌合の場に即したもののだが、応制百首も「晴れの歌合」同様、第一級の公の和歌行事であり、あまり卑近に流れることは好ましくなかったはずだ。作り物語では『源氏物語』撰取が81 84の二首あるほか、88が「雨夜の物語」と帚木巻を強く想起させる言葉を用いる。78の「いさらゐ」は和歌に詠まれることの少ない語だ

が、歌中に用いられた先例を探すと、『源氏物語』藤裏葉・松風巻の歌にゆきあたる。『源氏物語』撰取は季歌にも数首認められるが、恋部ではやや頻度が上がっている。

無論、『源氏物語』は右に述べた卑俗な歌とは異なり、新古今時代大いに尊重された作品である。『千五百番歌合』では後鳥羽院以下様々な歌人に多数撰取され、「たづね見つらき心の奥の海よ潮干の渴のいふかひもなし」(千五百番歌合・二四三七・定家、新古今・恋四・一三三三)などの秀逸の母胎ともなった。しかし作り物語である以上、勅撰集入集歌や漢籍と同列には扱われず、『源氏物語』の歌そのものは勅撰集には入集できない。

以上のように、通親の恋十五首は応制百首にふさわしい正統的な、規範的な詠み方からやや外れている。その撰取元の作品の多くは勅撰集に入集しえないため、勅撰集編纂時の古歌発掘にも寄与しない。通親の恋部が、勅撰集編纂を目前とした応制百首にふさわしいものか疑問が残る。ただし通親の恋部では十五首すべてに先行作品撰取を指摘でき、勅撰集歌の撰取も六首にのぼる。もし仮説の通り、先行作品の撰取が後鳥羽院の意向によっていたのであれば、恋部は確かにそれを満たしているだろう。通親恋部は後鳥羽院の意向を満たし、勅撰集的な歌を撰取しつつも、同時

に非勅撰集的な性格を示していることになる。

### 三 恋部84番歌と顕昭判

さて、恋部十五首のうち、84「ながむれば心さへこそうき雲やその古の夕暮れの空」について、顕昭は「右歌は源氏物語に、『君もさはあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕暮れ』と侍る歌の心にや、あしくもはべらず」と述べ、薄雲巻の光源氏詠を引いた。本節では一度、この顕昭判に集中して考えてみたい。

顕昭判は先行作品を引用する際幅広い語彙を見せるが、ここで用いた「心」は、歌の作者の意識的な撰取を認めて指摘する際にも、また作者の狙いとは関わりなく、類例や傍証等をあげる際にも用いている。しかし84の場合、顕昭判の示した歌とは表現、歌意、どちらにおいても重なりが小さい。顕昭は一体何を示そうとして、この引用を行ったのか。

まずは、薄雲巻の光源氏「君もさはあはれをかはせ人知れず我が身にしむる秋の夕暮れ」の詠作状況を確認しておく。当該場面では、梅壺女御(秋好中宮)に関心を持つ光源氏が、二条院に里下がりしていた彼女のもとを訪ね、春秋優劣論をもちかけた。秋と答えた女御に、源氏は右の歌

を詠みかけて共感を示し、それにことよせて近付こうとする。

こうした複雑な状況を、通親詠から読み取るには無理があるだろう。<sup>15</sup> それでもなお、源氏の歌を84の解釈に援用する道筋を探すならば、二首に共通する唯一の要素「夕暮れ」が注目される。「夕暮れ」は、『源氏物語』当該場面中では、故人をしのばせるよすがであった。源氏詠の初句「君もさは」は、梅壺女御の「あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ」という返答を受けている。「あやしと聞きし夕べ」は『古今集』歌より、人恋しい秋の夕暮れを指し、「はかなう消えたまひにし露」は、前年の秋に他界した六条御息所を指す。光源氏はこの女御の『古今集』引用と亡母追慕の心を理解したからこそ、自詠に「秋の夕暮れ」を詠み入れて共感を示した。藤壺が薨去した巻中の一場面と思えば、光源氏が「人知れず」偲んでいたのは六条御息所一人ではないだろうが、とまれ源氏詠の「秋の夕暮れ」には、故人を偲ぶ意が込められている。これを踏まえれば、顕昭は、通親84を死別した恋人を思う歌と理解し、その解釈を示すために薄雲巻の歌を引用したものと考えられる。

薄雲巻の引用は、84の解釈を示す方法としては、いささ

かもつてまわっている。しかし、公の歌合において不吉な表現を忌んだことは、『無名抄』の逸話<sup>16</sup>などから窺える。かつ、前節に一例あげたように、顕昭判が歌合にふさわしい規範を意識していることも、その端々から明らかである。顕昭は本作の晴儀性を重く見て、84歌の歌意を直接述べることを選けたのだろう。無論、死別を恋歌の中に仄めかすこと自体を、歌合には不適切であると咎めることもできただろうが、この歌の作者は権門の通親である。『千五百番歌合』の判者の中には作者の位相にさして言及しない者もあるが、顕昭は貴顕の番においてしばしば恐縮する姿勢を見せる。<sup>16</sup> 顕昭は『千五百番歌合』が晴れの歌合であったことと84の作者が当代随一の権勢家であったこと、双方を憚ったのだろう。そしてその結果が、『源氏物語』引用による遠回しな解釈の説明と、「あしくもはべらず」との評価だったのではないだろうか。

#### 四 恋歌と亡妻哀傷

それでは顕昭判から通親詠に戻り、84「眺むれば心さへこそうき雲やその古の夕暮れの空」の解釈を確認しておく。この歌が詠むのは「その古」と同じように「夕暮れの空」にかぶ「浮雲」であり、その雲を「眺め」つつ、「その古」

を思い返している主体の心にかかる「憂き雲」である。つまりるところ、「その古」に何があったのか確定しないことは84の歌意を定められないのだが、目下、「その古」がさす具体的な古歌や故事は見出されない。「その古」の仔細は、作者の胸のうちにしまわれているようだ。これを通親の拙さゆえとみることもできよう。しかしあるいは、「その古」が通親にとつて詳述する必要がない、または述べられないことだったからこそ、第三者には不十分な表現に留まった可能性もある。

そう考えてみるとき思い起こされるのは、正治二年（二〇〇）八月四日、通親の妻の一人であった、藤原範子が世を去つたことである。範子は後鳥羽院の乳母であり、土御門天皇生母の在子（後の承明院）および、嫡男通光の母でもあった。後鳥羽院院政下の通親にとつて、彼女がどれほど大きな存在であったかは想像に難くない。通親にとつては建久九年（一一九九）五月、長男通宗を失つたのに続く悲報であった。彼女の死から程を経ずして詠進されただろう『正治初度百首』に亡妻哀悼の心が反映されていることを、久保田淳氏は「恋十首はすべて愛する者を失つた嘆きの歌として読める」と指摘されたが、同じ傾向が『千五百番歌合』にも認められるのではないだろうか。ことに

『正治初度百首』の「思ひ暮らすながめは上の空なれば夕の雲のなつかしきかな」（恋・五七八）は、『千五百番歌合』の84と「ながむ」「雲」「夕」「空」といった要素が共通しており、両百首の恋部が地続きのものであることを思わせる。なお、この『正治初度百首』詠に関しては、近い時期に藤原定家、家隆が茶毘の煙を暗示する「雲」の歌を詠んでいることが指摘されている。『千五百番歌合』84の場合も同様の暗示を認めてよいだろう。

そこで通親百首の恋部を見渡すと、述懐歌かのように沈痛な歌が目につく。例えば83「明け暮れはなれし昔の忘れつつ夢かとのみぞ思ひなざる」の傍線部は『伊勢物語』の惟喬親王の不遇を嘆く「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは」（業平集では初句「忘れつつ」）によつている。「なれし昔」も、「朝夕になれし昔のものもしきを花のたよりにみるぞ露けき」（頼政集・六三二）などの例がある。83番歌は、雑部におかれたとしても、失われた昔を思う懐旧の述懐歌として成立しただろう。また80「いくよしもあらしものゆゑあぢきなくうき身をかへて思ふべきかは」を、木船重昭氏は「逢えるのは幾夜もあるまいに、詮なく、つらいわが身にかえて、思うべきではない。」と通釈されている。「いくよ」を「幾夜」と解するのは、恋

歌ではまず穩当だろう。しかしながら、この初句が避けがたく想起させるのは『古今集』の、人の身のはかなさを詠んだ「幾世しもあらじわが身をなぞもかく海人の刈る藻に思ひみだるる」(雑下・九三四・読人不知)である。これを踏まえれば、80の初二句は「何年も生きられないであろう」と、下句の「憂き身」のはかなさを言うものとしても解せる。この著名歌がある以上、「いくよ」を「幾夜」の意味に取つても、命の短さのイメージは排しがたくつきまとう。

通親百首恋部には、嘆きや懐旧、喪失感、人の命の短さをいう述懐的な表現のみならず、哀傷歌に類出する表現も多数認められる。例えば87「忘れ草おふる野辺をば尋ぬれど昔偲ぶぞ猶も露けき」は、いっそ忘れられないかと忘れ草の生える野を尋ねても、しのぶ草のように、昔を偲ぶ涙にくれている主体の心情を歌う。かつての恋を思う歌としても解釈できるが、「野辺」「尋ぬ」の取り合わせには、「白雪の降りつむ野辺は跡絶えていづくをはかと君を尋ねむ」(榮花物語・鳥辺野・中納言隆家)のような例がある。類語の場合では、『源氏物語』の「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をばとはじとぞ思ふ」(花宴卷・朧月夜)が著名である。「しのぶ」も、やはり哀傷歌にしばしば見られる

語であるが、通親百首の恋部では83・88にも認められる。また先述の83および81「見し夢をしのぶる雨のもらさばやうつつともなき袖の雫を」は「夢」の語を含む。死は往々にして夢に例えられるが、特に「見し夢」については、通親が承安五年(一一七五)秋、春に他界した父雅通を「見し夢を忘るる時はなけれども秋の寢覚めはげにぞ悲しき」(殷富門院大輔集・一七〇、新古今集哀傷・七九一)と詠んでいる。『千五百番歌合』に近い時期では、正治二年(一一二〇)秋、藤原良経が「見てもまたあふよまれなる夢のうちにやがてまぎるる我が身とがな」(源氏物語・若紫卷・光源氏)を本歌に、「見し夢にやがてまぎれぬ我が身こそとはる今日もまづかなしけれ」(秋篠月清集・一五六二、新古今集・哀傷・八二九)と詠んでいる。妻の一条能保女に先立たれた良経に対する、俊成の弔問にこたえた歌だ。81番歌につき、顕昭判は「見し夢をあふよありやと嘆くまに目さへあはでぞころもへにける」(源氏物語・帚木)を指摘しているが、このような、「見し夢」の哀傷歌での作例も考慮すべきだろう。

再度84「眺むれば心さへこそうき雲やその古の夕暮れの空」に戻ると、この歌にも「古」や「うき雲」など、哀傷歌にも用いられる語が確認される<sup>2)</sup>。かつ、この歌は『源氏

物語』の夕顔哀傷歌「見し人の煙を雲と眺むれば夕べの空もむつまじきかな」（夕顔巻・光源氏）や、葵の上追悼歌「雨となり時雨の空のうき雲をいづれの方とわきて眺めむ」（葵巻・頭中将）と表現が近い。夕顔巻の場合、詠まれている景物の大半が共通している。葵巻の歌の場合は『源氏物語』における詠歌の場面も「時雨うちしてもあはれなる暮れつ方」であり、通親84の「夕暮れ」と合致する。夕顔巻・葵巻、どちらの女君哀傷歌も通親が想起・撰取した可能性を十分に持つだろう。先述の通り、84は表現のみを見ても亡妻哀傷を読み取ることができ、この撰取を考慮に入れば、哀傷の心はより確かになる。なお、先に引いた『正治初度百首』恋部の類歌「思ひ暮らすながめは上の空なれば夕の雲のなつかしきかな」（五七八）も夕顔巻の「見し人の…」を本歌としている。

以上を見れば、『千五百番歌合』恋部にも、『正治初度百首』同様の亡妻哀傷が認められるだろう。そしてそれには、『源氏物語』がしばしば関わっていたことに注意したい。光源氏の生涯は実母の桐壺更衣に先立たれるところから始まり、夕顔、葵の上、藤壺、紫の上と、女君との死別を繰り返していく。作中人物の死を伴わない場合でも、花宴巻・朧月夜の前提「うき身世に…」など死を暗示する印象的な

歌が、中世初期の歌人たちに親しまれてきた。ことに俊成や良経の亡妻追悼を始めとする、哀傷歌と『源氏物語』の関わりをめぐっては、渡部泰明氏の論考がある。<sup>92</sup>『千五百番歌合』の通親百首の検討により、通親も同時代の風潮の中にいることが確認できる。なおかつ前節では、顕昭判が『源氏物語』を経由することで亡妻哀傷歌との解釈を示そうとしていると考えたが、それも『源氏物語』が死別を歌う際の表現の拠り所となっていく現象の、一つの現れなのではないだろうか。

## 五 雑部の構成

ここまで先行作品撰取に注目しつつ、季部・恋部の通親詠をみてきた。雑部にも『古今集』等の撰取は認められるが、一方で、また別の注意を要する特色も見受けられる。まずは、十首中前半の五首を掲げる。

91 そのかみや祈りしことは豊受のしるしぞ君が恵みなりける（二七〇四）

92 榊葉やいつもみどりの標のうち鳩吹く秋は風ぞ身にしむ（二七三三）

93 そさのをも君がみことのためとてや八雲のしるし思ひたちけん（二七九一）

94 神垣に夜やあけがたになりぬらん木綿付鳥の声のき

こゆる (二八一九)

95 すみのえの松風通ふからことを波の緒かけて潮や引  
くらん (二八四七)

このうち太字にしたのは、神明や神域に関わる語である。

91は、伊勢の豊受大神の名を詠みこみ、かつて祈ったことが神に納受された証が、君、すなわち後鳥羽院の恵みであると詠んでみせる。伊勢にまつわる「そのかみ」は、良経の「神風や御裳濯河のそのかみに契りしことの末をたがふな」(新古今・神祇・一八七二)が二神約諾を、西行の「岩戸あけしあまつみことのそのかみに櫻を誰か植ゑ始めけむ」(西行法師集・六〇五)が天岩戸を詠んでいるように、はるか神代まで遡ることが少なくないが、通親91が具体的にいつ、誰の、どのような祈りを詠んでいるのかは定かでない。ただ、通親は寿永二年(一一八三)公卿勅使として伊勢に赴いており、その折の経験が詠歌に影響した可能性もあるだろう。93は素盞鳴命の「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」を引き、やはり「君」こと後鳥羽院を讃えている。『古今集』仮名序に人の世の歌の始まりとしてあげられる歌を引いている以上、これはただ和歌興隆を讃えるものではなく、後の『新古今集』や『最

勝四天王院障子和歌』に結実してゆく、国家事業としての和歌行事への賛美なのだろう。

一方92 94は特定の神や社を詠んだものではなく、社頭の光景を詠んだものである。92の「鳩吹く秋」は難義の語として諸書に取り上げられてきた語だが、およそ、狩人が鳩の鳴き真似をすることを言ったらしい。殺生に関わる言葉が神域にふさわしいものか覚束ないが、おそらくは「ちはやぶる神の斎垣にはふ葛も秋にはあへず紅葉しにけり」(古今集秋下・二二六二・貫之)のような歌の変奏を、特異な語によって試みたのだろう。94の「木綿付鳥」も、木綿と神垣の言葉の縁から詠み込んだものか。「木綿付鳥」という鶏の別称は『古今集』の後は作例が少なく、「鳥」題が設けられた『正治初度百首』において、にわかに多数詠まれた語である。その後さらに一般化していく語ではあるが、『千五百番歌合』の時点では目を引く言葉だったのだろう。95は「都まで響き通へるからことは波の緒すけて風ぞひきける」(古今集雑上・九二二・真静法師)を本歌とする。住吉社の名物の松から詠み始めるが、松風との縁で琴、また『古今集』に見える地名の「からこと」を引き寄せ、そのまま海上の景へと移動する。住吉三神は海の神ではあるが、「からこと」は現在の岡山県倉敷市児島唐琴かとも推定されて

おり、住吉からは距離がある。これも92・94同様、やや変わった表現と、その言葉の縁に興じたものと取りたい。

以上のように、通親雑十首のうち前半五首は天神地祇にまつわる言葉を用いている。しかしそのうちの二首は後鳥羽院の賛美に核がある。三首は社頭に関わる情景を詠んではいるものの、表現の工夫に関心が向かっており、社頭の美景を讃えて神を賛美するものではない。一般に、勅撰集や百首歌で「神祇」に分類される歌は、天神地祇への崇敬や本地垂迹思想を背景に、神域を賛美し、胸中を吐露し、祈りを捧げるものだろう。以上の雑部前半の五首は、一般の神祇歌の枠組みには収まりそうにない。

さらに後半の五首では、また別の傾向を見せるようになる。なお、97は一見前半に近いものに見えるが、本地の強調からして釈教歌に近いものと捉えておく。

96 老いののち月にすみけん唐人のあとをたづねて入る

山路かな（二八七五）

97 八百万神の誓ひもまことには三世の仏の恵みなりけり

り（二九〇三）

98 位山跡を尋ねてのぼれども子を思ふ道に猶まよひぬ

る（二九三二）

99 世を厭ふ人の入るなる山里にまたすみわびていづち

ゆかまし（二九五九）

100 年を経てこしかたのみぞしのばるるあらしかばと

思ふ人ゆゑ（二九八七）

このうち96の「月にすみけん」とは、『和漢朗詠集』山家題「銜嶺曉月出窓中」（五六二・直幹）のように、月が間近く感じられるほどの山中で、月に心を澄ませつつ暮らした隠逸のことを言うのだろうか。しかしこうした趣旨の漢詩文は無数にあり、「唐人」に特定の人物は比定しがたい。あるいは昇仙して月に昇った者の伝説を踏まえている可能性もあるが、目下典拠を見い出せない。ともあれ主体は、何かしらの古例を襲って、山中に隠棲しようとしているのだろう。さらに99の主体は、山中にも住みかねて身の置き所を見失っている。「世を捨てて山にいる人山にてもなほ憂きときはいづちゆくらむ」（古今集雑下・九五六・躬恒）が想起される。96・99のような通世の希望は、多分に虚構的なものであつて実現するものではないが、この二首の主体は、限りなく作者通親自身に近いだろう。通親は若年の頃にも白居易の『廬山草堂記』にならつて、『擬香山模草堂記』を著している。

また98は通光と通具の二人が『千五百番歌合』作者に召されていたためあつてか、我が子を思う心の闇を歌う。

本歌は兼輔の「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(雑一・一一〇二)である。「跡を尋ねてのぼれども」というのは父雅通の極位極官である、正二位内大臣に昇ったことをいうのだろう。この歌の主体も、限りなく通親に近いものとみなしたい。96と同じ「あとをたづねて」を用いているのは意識的な工夫ではないかもしれないが、96・98の違いに、文芸の中では文人の古例を慕い、現実の社会にあつては家祖の足跡をたどってゆく権門歌人の姿がよく現れている。100も率直な感懐が吐露しており、通親自身的心境を反映したものと思しい。以上、雑部十首中の後半にはおおむね、胸中を吐露する、述懐的な性格の五首が並べられている。

このように、通親雑部においては、前半と後半で大別できること、またその前半部が、神祇歌と共通する表現を持ちつつも、神祇歌とはみなしがたい内容を持っていることが指摘できる。そしてこの特色も、『千五百番歌合』雑部中、通親一人に限ったことではない。

例えば前半部と後半部に顕著な変化が見られる例としては、まず良経の雑十首があげられる。この十首に關しては谷知子氏が詳細に検討され、前半五首に漢詩文的な諷諭的述懐、後半五首に和歌的な述懐を置くという和漢融合の実

験作とみる説が出された。

あるいは、通親の前半五首が神にまつわる語を用いつつも神祇題の歌とは認めがたいのと同じように、表現は特定の部立や歌題を思わせるが、内容は必ずしもその範疇に収まらない歌を詠む歌人もいる。例えば小侍従の雑部には、恋歌にほど近い表現の歌が多数含まれるが、しかしそれらはいずれも恋歌の範疇には収まらない。

本来雑部とは、他の部立に比べて詠むべき内容が多彩であり、季節や恋部のような強固な時間的秩序を持っていない。比較的自由度の高い部立であるにもかかわらず、類似する傾向が、歌風や位相の異なる歌人にも認められるとなると、雑部に関しても後鳥羽院の何かしらの意向が働いていた可能性がある。しかし、こうした『千五百番歌合』全体にかかることは後稿を期すとして、通親詠にみられる特色をまとめておきたい。

### おわりに

本稿では、『千五百番歌合』が後鳥羽院の意向の強く働く応制百首であったこと、通親は『古今集』等の撰取を通じてそれにこたえつつ、同時に応制百首の規範を侵犯しかなかった、俗謡の撰取や、亡妻追悼も行っていったことを述べた。

またその亡妻哀悼には同時代の他の歌人と同様『源氏物語』が深く関わっていたことにも触れた。

久保田淳氏は通親の『正治初度百首』の『遊仙窟』撰取歌に關して「私的な動機でこの本文を踏まえ、そのみならず「恋」の十首をも個人的な追懐の情で埋めた通親の意識のあり方は、やはり問題とされてよいであろう」と述べられている<sup>(25)</sup>。この疑義は、『千五百番歌合』にもあてはまるだろう。通親はその百首全体を、「年を経てこし方のみぞしのばるるあらましかばと思ふ人ゆゑ」（二九八七）をもつて閉じている。おそらくは亡妻を含む泉下の人を思い、生前を懐かしむ歌だが、これは、他の歌人らが百首目を「君にかくあひぬる身こそ嬉ししけれ名やは朽ちせん世々の末まで」（雜・二九七四・良経）などと結んでいるのと比べて、およそ応制百首の掉尾にふさわしい表現とは思えない。ただし、通親の百首目は、同時に『拾遺集』の「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」（哀傷・二二九九・藤原為頼）の撰取なのである。前節でみた他の述懐歌も多くは勅撰集の歌に基づいており、亡妻哀悼にあたっては、同時代広く仰がれていた『源氏物語』を撰取している。このようなとき、先行作品撰取は私的な歌に、応制百首らしい正統性を持たせる役割を果たしている。

『千五百番歌合』は勅撰集に準じた部立構成を持つ応制百首である。加えてそこに後鳥羽院による先行作品撰取のゆるやかな指示があつたのであれば、歌人に許された選択の幅は広くない。しかし通親は、先行作品撰取という指定に従うことで、かえって『千五百番歌合』の場に卑俗なものや私的なものを持ち込み得ていたのではないだろうか。

最後に、これまで言及できなかった祝賀の歌にも簡単に触れておく。通親の場合、『千五百番歌合』は『正治初度百首』に比べて祝賀の表現を持つ歌が減少しており、季節中祝意を持つ歌は次の一首のみである。

35 水無月の今日くれたけの節折りにぞ君が千歳の数は添へける（夏・一〇四五）

ここで詠まれた「節折り」は、六月、十二月の晦日の祓において、竹の枝を天皇や東宮の背の丈に應じて折り寸法を計る行事で、『江家次第』等の故実書のほか、平安末期成立とされる『東宮年中行事』にも見える。『猪熊関白記』には正治元年（一一九九）六月から建仁三年（一一〇三）六月まで、半年ごとの祓の折に節折の記述を確認できる。この行事は上皇に關わるものではないから、35の祝賀の対象には土御門天皇および、正治二年（一一〇〇）四月に立坊した東宮守成親王（のちの順徳天皇）が想定できるだろう。通

親は土御門天皇生母承明門院在子の養父であるから、土御門天皇の外祖父である。なおかつ通親は、守成親王立坊に伴い東宮傳となっており、嫡子通光は東宮権亮となつてゐる。天皇・東宮に祝意を示す理由は十分にあるはずだ。政治家としての通親がすでに後鳥羽院以後を見据えていたことが、『千五百番歌合』にも反映されているのだろう。

『千五百番歌合』と『正治初度百首』の比較からは、この他にも多々検討すべき課題が見出される。積み残したものは多いが、今後も考察を重ねてゆきたい。

#### 【注】

- (1) 久保田淳氏「源通親の文学―その和歌について―」（『論叢 王朝文学』〔笠間書院、一九七八〕）
- (2) 上野順子氏「正治・建仁期の影供歌合について―土御門通親を中心に―」（『和歌文学研究』六七号、一九九六・一）
- (3) 尾葉石真理氏「源通親の『正治初度百首』」（『国語と国文学』九二・二、二〇一五・二）など。
- (4) (<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/r-db-index.html>)
- (5) 有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』（一九六八、風間書房）
- (6) 当該和歌の本文は『千五百番歌合』諸伝本および『夫木和歌抄』（『怜野集』等の類題集では見出すことができない。ただし、判詞（春三・俊成）には「右歌、根はふよこの、万葉集の心、花の色むらさきむつまじくなどは見え侍るを、上の三句、かかる歌を見侍りし心地ぞし侍れど、さやかに覚え侍らぬ上に……」とあり、『万葉歌』撰取であったことが伺われる。また俊成の口吻からは、通親の上句が「久安百首」の俊成「紫のねはふよこのつぼすみれま袖につまん色もむつまじ」に近いものであっただろうと推量される。
- (7) 桑原博史氏「源通親伝素描」（『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』、一九七二・一二）
- (8) 目良有子氏「源通親の和歌」（『甲南女子大学大学院論叢』一〇、一九九八）
- (9) 拙稿『千五百番歌合』恋部の先行作品撰取」（『国語と国文学』九六・一、二〇一九・二）
- (10) 野本瑠美氏「『久安百首』の羈旅歌」（『国語と国文学』八六・一、二〇〇九・一）、山崎桂子氏「正治百首の研究」（勉誠出版、二〇〇〇）四五九・四六二頁等が指摘されている。
- (11) 村尾誠一氏「後鳥羽院正治初度百首と勅撰和歌集への意志―『正治和字奏状』の再検討を発端に」（『国語と国文学』八五―四、二〇〇八・四）
- (12) 『千五百番歌合』では幾人かの歌人に後鳥羽院の和歌行事を

礼賛するような表現が認められる。例えば通親の場合は、「そさのをも君がみことのためとてや八雲のしるし思ひたちけん」(雑部・二七九一)と『古今集』仮名序を踏まえた賛美を見せている。

(13) 顕昭も判詞で「右歌は、世俗のくちずさみの歌に「雨ふればのきの玉水つぶつぶといはばやものを心ゆくまで」と侍る歌に、源氏の雨夜の物語ををかくよみつがれて侍る歎」(一一三〇番判)と指摘する。

(14) 例えば一二〇一番の左方、後鳥羽院の「眺むればこぬ人またるわびつつも今宵の月にあかずかもねん」(二四〇〇)に對しては「左歌は、『月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつつもねん』と申す歌の心にこそ侍るめれ。『雨かもねん』と侍る、おそらくは月を翫ぶ心も深くなりて、本歌よりも勝りてこそきこえ侍るめれ(以下略)』と、作者が本歌の要素を取捨選択した過程とその効果を論じた。一方一三一八番の右方、定家詠「かれぬるはさぞなためしとながめてもなぐさまなくに霜の下草」(二六三五)については、「右歌は、もし源氏物語に、「ほのめかす風につけても下萩のなかばは霜にむすばれにけり」など侍る歌の心にや。かやうに申すべきにても侍らねど、歌のよしわるしもきこ

え侍らねば、おどろかし申すにつけて歌のほどはみゆる事にて侍れば、心にくくもなり侍る歎、まさり侍るべし」と、『源氏物語』引用が必ずしも適當ではないことを断りつつ、右歌の特色を示すために引用している。

(15) なお、『愚管抄』には「承明門院ラゾ母ウセテ後ハイシ参ラセケル。院ハ範季ガムスメヲ思召テ三位セサセテ。美福門院ノ例ニモニテ有ケルニ」とある。この記述を信頼するならば、六条御息所・秋好中宮・光源氏の関係と藤原範子(通親妻)・源在子(通親養女)・通親の関係には通うところがあり、顕昭判が薄雲卷の歌を引いたことの含意も考えられるかもしれない。しかし、慈円の記述の信憑性ははじめ問題点も多く、慎重になるべきだろう。

(16) 「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」(古今集恋一・五四六・読人不知)

(17) 長明が高松女院妹子内親王家での歌合に「くづる」の語を含む歌を出詠しようとしたところ、「崩御」を思わせるとして止められたとの逸話が見える。

(18) 顕昭は良経、慈円の歌を負けとする際には恐縮する旨を述べている。例えば一二三三番(左慈円、右定家)では「(前略)とりどりに侍れど、なほ歌合の法、うるはしきにつきて右をかちと定め申す、おそれをわすれて道を執之故なり」と

述べる。

(19) 注1参照。

(20) 和歌文学大系四九『正治二年院初度百首』(二〇一六、明治書院)。通親の百首は久保田淳氏が担当された。

(21) 木船重昭氏『千五百番歌合全釈』(二〇〇一、私家版)。

(22) 「熊野に詣で侍りけるに小一条院の通ひ給ひけるなにはといふ所にとまりて昔を思ひいでてよめる」との詞書を持つ「古になにはのことゝも変はらねど涙のかかるたびはなかりき」

(後拾遺集哀傷・五九五・源信宗) や、陽明門院の法事の翌

日詠まれた「定めなき世をうき雲ぞあはれなる頼みし君が煙と思へば」(『金葉集』二度本雑下・六二二・藤原資信)等の例がある。

(23) 渡部泰明氏『中世和歌史論 様式と方法』(二〇一七、岩波書店) 第三編第四章。

(24) 谷知子氏「藤原良経の『千五百番歌合』雑十首を読む」(『和歌文学研究』一〇四、二〇一二・六)。

(25) 注1参照。